審査の結果の要旨

氏名　芦田 祐佳

情動の理解や調整の能力は情動コンピテンスと呼ばれ、生涯にわたる心身の健康や社会生活に重要な役割を果たすことが明らかにされてきている。しかし、その育成に対し、教師がどのような支援を行っているのかを問うた学術研究は、少ない。本論文は、小学校低学年児童がネガティブな情動を示した時の教師の支援過程を、教室での参与観察や調査研究をもとに実証的に検討した論文である。論文は全体で、5 部 12 章で構成されている。

第Ⅰ部第 1 章では、児童の情動コンピテンスの特徴と教師の情動支援研究を概括し、第 2 章では、教師間での差異と同一学級内での児童間や場面間での支援の差異を問うという課題を導出している。そして第 3 章では、課題検討のための研究方法を整理している。

第Ⅱ部第 4 章（研究 1）では、小学校教師 344 名に仮想場面を用いた質問紙調査を実施し、情動の沈静化を意識する情動焦点型、児童同士の解決を意識する関係焦点型、学習活動の進展を意識する学習焦点型という 3 種類の教師の判断を示し、担当学年が低いと関係焦点型判断よりも情動焦点型判断を採る確率が高く、社会的スキル育成重視の教師は、学習焦点型よりも情動焦点型や関係焦点型判断を採る確率が高いことを明らかにしている。

第Ⅲ部では、小学 2 年生 1 学級の教師と児童の二者間相互作用 1833 場面を抽出し、第 5 章（研究 2）では、教師の情動コンピテンス評定値が低い児童には、ネガティブな情動に対する個別支援頻度がより多いこと、第 6 章（研究 3）では、9 の支援方略を同定し、情動コンピテンス評定値により個別支援を行う場面（一斉/個人）が、学業達成評定値により個別支援を行う活動内タイミング（早期/遅期）が異なることを明らかにしている。第 7 章（研究 4）では、支援場面映像を用いた教師面接から、児童の情動理解や情動制御に課題を感じた際に、児童の情動制御を意識して支援方略を変化させていることを示している。

第Ⅳ部では、同一学級での教科学習とサークルタイムという場面間の差異に焦点を当て、第 8 章（研究 5）では、特定児童がネガティブな情動を示した事例の分析から、情動コンピテンス高群と低群児童では、発話数や注視数に違いがあること、第 9 章（研究 6）では、児童の否定的発話は他児童から否定的に捉えられるのに対し、肯定的発話はサークルタイムでは肯定的に、教科学習では否定的に捉えられるという場面間の差異を示している。第 10 章（研究 7）では、教科学習に比べてサークルタイムでは、教師の積極的介入は少ないこと、第 11 章（研究 8）では、教科学習では授業計画や時間など、授業としてその場をいかにコーディネートするかという観点から、教師は情動支援を変えていることが示された。

そして第Ⅴ部第 12 章では、上記 8 研究を概括し、今後の課題と展望をまとめている。

本論文は、小学校教師 1 名担任学級の観察を中心とした研究であるため、知見の一般化に限界がある。しかし、教師の情動支援方略を同定し、児童間・場面間での差異を実証した点で当該分野への可能性を拓く研究であり、教育実践にも寄与すると評価できる。よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するにふさわしい水準にあると判断された。